

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム	申請大学名	九州大学
申請大学長名	有川 節夫		
プログラム責任者	安浦 寛人		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的には、おおむね順調にプログラムが実施されている。 ・本プログラムの中軸に位置づけられる「問題解決セミナー」や「決断科学セミナー」も具体的で、魅力ある課題が設けられているように見受けられる。 ・採択時は「学生への過重負担」が懸念されていたが、意見交換を行った学生の発言からは、特段、問題となり得る状況は発生していないことが確認できた。 ・意見交換に参加した学生は大変優秀で、プログラム内でも「部活」と称する独自の活動を展開し、極めて意欲的に取り組んでいる様子が伺えた。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決断科学という学問を構築することは、非常に素晴らしい試みである。しかしながら、ビジネススクールで取り上げられているものとの違いなどを明確にした、より具体的なビジョンは未だ示されていない。学問としての体系化及び具体化に向けた検討を早急に行い、世界をリードするような決断科学を作り上げて頂きたい。 ・決断科学の教科書作りに関して、学生は既に敷かれたレールに乗っているだけのように感じている様子が見受けられた。この点の意識改革が必要である。学生独自で様々な工夫をして、さらに決断科学に深く取り組むような動きに期待する。 ・学生との意見交換で、コミュニケーション力や実行力が伸びたという実感を学生自身が持っていることを確認できた。一方で、例えば学生へのアンケートを実施するなど、各マイルストーンにおけるプログラムの妥当性の確認を如何に行っていくかということの指針も明確にして頂きたい。 ・5つのモジュールでの活動はアジアの発展途上国が多く、世界の最先端に行く先進国のような環境で得られる緊張感がともすれば得られない。この点も配慮した活動についても取り入れるよう検討を願いたい。 ・学生との意見交換の中で、多くの学生はメンターとの良好な関係を築いていると判断できたが、中には、まだメンターの存在を実感していない学生もいるように見受けられた。メンターの活動状況についても、プログラムの中でしっかりと評価する必要がある。また、各特任教授のエフォート率をPO現地訪問までに示して頂きたい。 ・プログラムが成功するか否かは、学生の資質によるところも大きいと思われるので、優秀な留学生の確保等、学生の募集についてはさらに力を入れて頂きたい。 ・学生から出された一番の懸念事項として、本プログラムより奨励金を受給した場合、他の奨励金を受給できないなどの様々な制約があるため、月額10万円では厳しいということや、旅費の支援についてもより積極的に活動を行いたい学生にとっては、当初の期待よりも制限が多いということが挙げられた。この点は全体の予算を考慮しながら、支援策を再検討する必要がある。 ・国外からの優れた人材の雇用（特任教員）が少ないように見受けられるが、国際性の涵養という観点からも、さらに増やす努力が必要である。 ・セミナー等のスケジュールがフレキシブルである点は評価できるが、その一方、突然の予定変更が生じることもあり、実験を行っている学生にとっては対応が難しいという意見があった。学生の所属に配慮した計画的なスケジュールを立てる必要があるのではないか。 			